

Home Sweet Home

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご臨席の保護者の皆様、お子様のご入学、心よりお慶び申し上げます。学長の郡司と申します。

今年は寒い日が続いていて、例年、この時期ですと桜がもっと咲いていていいのですが、今年は少し遅れているようです。でも、皆さんの心の中にはきっと満開の花が咲いているのではないかと思います。

自分の「ホーム」を作る

私たちは、これから、4年、あるいは大学院への進学などによっては、それ以上をここで過ごされる皆さんに、居心地のよい環境を提供することに全力を尽すつもりでいます。そして、皆さんが卒業してからも帰ってきたくるような「ふるさと」「ホーム」を作りたいと思っています。

今入学したばかりなのにもう、卒業後に「帰ってくる」ことを言っているのが、奇妙に思われているかもしれません。でも、実は、この大学が皆さんにとって帰るに値する場所になるかどうかは、皆さんがこれからの4年間をどう過ごすかに大きくよっているのです。

大学というところは、学生の自主性を大事にし、学生が自主的に生きることを期待しています。もちろん、今までも、大学を選んだとき、学部や学科を決めたときに、先生や保護者の方々の助けを借りながらも、基本的には自分で選んできたと思います。けれども、これからはもっともっと自分で選択をしていかなければいけないことが控えています。

例えば、どの科目をとっていくか、ということがあります。大学では皆が同じようにとらなくてはならない必修科目というものの他に、自分で選んでいく選択科目があります。そのため、時間割は一人一人が違ったものになり、同じ学科の人でも違った時間割になります。高校のときに比べると、かなり複雑なシステムですので、必要な単位をとってきちんと卒業するためには、慎重に履修計画を立てる必要があります。

授業以外にも、クラブ活動、ボランティア活動などもあります。学科を越えた友だちができるチャンスですが、それだけに、学生一人一人の大学での過ごし方が多様なものとなります。その意味では、自分の大学生活は自分で作っていくのだという心構えをもっていて下さい。

『ビルマの豎琴』

昨日は国際的に注目されている選挙がミャンマーという国でありました。長い間、不自由な生活を強いられていた、アウン・サン・スーチーさんの当選も確実だと言われています。

この国は、今は「ミャンマー」と呼ばれていますが、昔は「ビルマ」と呼んでいました。そのビルマを舞台にして、終戦直後に日本人の作家、竹山道雄によって書かれた児童向けの物語に『ビルマの豎琴』というものがあります。

この物語は1956年、それから1985年に映画化されていますけれども、新しい方の映画でも、皆さんのほとんどが生まれる前の話なので、ビデオでも、見たことのある人は少ないかと思います。戦争末期に音楽大学出の隊長の下で合唱する部隊の話と、一言でまとめてしまえばそういう話なのですが、その中で非常に印象深い場面があります。

日本軍がビルマの人たちと一緒に食事をして歌を歌っているとき、突然、ビルマの人たちが皆外に出ていってしまいます。外を見ると、イギリス軍の姿があり、どうも囲まれているようです。

日本軍は敵を油断させようとして、歌をやめずに、歌を歌い続けます。そのときに歌っていたのが、日本の学校でよく歌われていた唱歌の「埴生の宿」という歌で、主人公の水島上等兵が豎琴で伴奏するのですが、ふと気付くと、外からも同じ歌が聞こえてきます。

何だ、日本兵かと思って安心するんですが、よく聞くと外では英語で歌っている。「埴生の宿」というのはもともと19世紀の始め、1823年にイギリスで作詩作曲された歌で、これを明治の半ば、1889年に日本語の訳詞をつけたものだったんですね。ですから、日本兵もイギリス兵も、同じ歌を歌えて不思議はなかった。

物語の方は、実はその3日前に戦争が終っていたということを知り、日本軍は抵抗せず捕虜になりますが、しばらくしてから全員無事に日本に帰れることになります。しかし、ただ一人、水島上等兵だけは、一度仲間とはぐれてしまって、その後、お坊さんの姿になっていたのですが、ビルマで死んだ日本人の骨がいっぱいあちこちにあるので、それを弔うために日本には帰らないということを選びます。

「埴生の宿」と Home Sweet Home

少し、『ビルマの豎琴』の紹介が長くなりましたが、ここで実は、話したかったのは、「埴生の宿」という日本語の歌と、その原曲の、Home Sweet Home の歌詞の違いです。

原曲の詞は5番までであるのですが、よく歌われているのは2番目か3番目ぐらいまでです。1番はだいたい、かいつまんで内容を言うと、どんなに豪華な宮殿のようなところでいても、つつましい我が家が一番よい、というような内容です。Home sweet home、懐しい我が家、という言葉に続いて、there's no place like home、家のように素晴らしいところはない、という部分が繰り返し歌われます。

一方、日本の「埴生の宿」の1番も同じような内容なのですが、2番以降になると、この2つでかなり違いが出てきます。Home Sweet Home では、作者は、遠くから故郷のことを思っていて、故郷で自分のことを思っていてくれるはずの母や、優しくした父の思い出を語っています。最後には、故郷へ帰ろう、二度と離れることはよそう、という形になります。

実は、Home Sweet Home の作詩者はアメリカ人の John Howard Payne という人で、イギリスに住むようになってから、home であるアメリカのことを思ってこの詞を書いているのです。

一方、「埴生の宿」の方は、故郷の花鳥風月、花や鳥、月が出てきて、そういう自然は語られますが、そこにいるはずの家族は登場しません。また、語り手がはたして、故郷から遠く離れているのかどうか、それもはっきりとはわかりません。

「宿」と Home

このように、Home Sweet Home と「埴生の宿」では故郷を見る視点がずいぶん違っているのですけれど、さらに、題名の中の home という英語と「宿」という日本語のことばの違いも考えたいと思います。

「宿」というのは、昔話ですと、舌切り雀の「すずめのお宿」のように、住んでいる家

という意味で使われることもありますが、現代語では、もっぱら、旅の途中に泊るところで、一時的なものということになると思います。

また、「住む家」の意味であっても、あるいは、一時的に泊るところという意味であっても、「宿」というのは建物という物質的な存在であって、そこにいる人間まで含まれているとは考えられません。それに対して、homeには、「住む家」ということに加えて、「家族がいて心の拠り所となるところ」という精神的な意味あいを感じられます。

大学を Home に

皆さんがこれから過ごす大学というところは、4年間という長い期間ではあるものの、入学してから卒業するまでの間という期間に、一時的に滞在するところにすぎず、その意味では「宿」でしかないとも考えることもできるでしょう。

そして、大学としても、この4年間を気持ちよく過ごしてもらうための「おもてなし」の心をもって、旅館業のようにして、皆さんに接すればよい、という考え方もあり得るかもしれません。

しかし、私たちは、皆さんに、あえて、この大学を home と考えていただきたいと思っています。保護者の方々に前にして差し出がましい言い方もできませんが、私たちは、入学した皆さんの「母」であり「父」でありたいと願っています。そして、卒業後、遠く離れることになっても、必ず帰ってきたいと思える home でありたいと思っています。

大学は敷地や建物だけの存在ではありません。「松蔭」という学校は明治の女学校の時代から数えると、今年で創立 120 周年を迎えます。その間、校舎はもちろん、学校の敷地も何箇所か移転を重ねてきました。教職員ももちろん完全に入れ替わっています。そういう移り変わるものを超えて存在し続けてきている「松蔭」というものを作ってきたのは、他ならぬ皆さんの先輩たちです。

これからの4年間で、自分たちだけでなく、後輩たちの心の拠り所になるような学校を、私たちと一緒に作っていただけたらと思います。

一緒に Sweet home を作っていきましょう。